

保育者を目指す学生が教育課程の重要性を
身に付けるための教育実践の工夫

宿 南 久美子

Classroom Practice on the Method of Teaching the Importance of Curriculum

Kumiko Syukunami

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育者を目指す学生が教育課程の重要性を 身に付けるための教育実践の工夫

Classroom Practice on the Method of Teaching the Importance of Curriculum

宿南 久美子

Kumiko Syukunami

I. はじめに

幼稚園、保育園、また認定こども園では、日々保育者が中心になって保育を展開している。しかし、子どもたちがそれぞれ興味・関心に基づき気の向くままに活動させればよいのではない。遊びや生活を大切にしたい幼児教育だからこそ、幼児期にふさわしい生活が展開されることを重視し、入園から修了に至るまでの幼児の生活経験や発達過程を長期的スパンで捉える必要があり、関係法令と「幼稚園教育要領」に基づき作成する「教育課程」に沿って保育内容を展開していかなければならない。

ところが、養成課程の学生はある一定の期間実習に行き、目の前の子どもの様子、保育者の子どもとの関わりを観察するに終始し、責任実習においても発達年齢にあったものを考えるものの得意分野の指導案を立案して実習していく。すなわち学生はこの経験のみでは、保育者として子どもたちに向き合う専門職業人としての経験の積み重ねの時間で見ることになる、この羅針盤的存在である「教育課程」が見えるはずがない。また、養成課程における時間に限りがある実習期間のみでは、保育者として自らの体験を通じた実感として、その必要性も感じ切れていない実態がある。

保育者としての豊かな実践経験を持ち養成課程で教壇に立つ教員は、この学び育ちゆく学生達に対して伝えられることは非常に多くあるはずである。一方で、この豊かな実践経験を有する保育者は、養成課程における教育実践の経験は豊かであるとは言えない。先に述べたような保育者としての経験の積み重ねから深い学びが得られていく、教育課程とは何か、なぜ必要なのか、どのような要素から構成されているのかなどの内容において、実務家教員として、養成課程でより多くの学びを与えられる授業にはどのような教員としての教育実践が必要であるのかについて熟考し、計画、実践、振り返ることには多くの意味があるであろう。

そこで本研究では、養成課程で学ぶ学生の実態に応じて、教育課程論の講義において、授業者として取り入れた教育実践の工夫が学生の学びに与えた効果について検討したい。

II. 方法

1. 参加者

(1) 授業者：本講義の授業者は、研究実施時、幼稚園教諭として40年勤務し、その内兵庫県北部に位置する但馬地区幼稚園教育指導員を4年、園長として6年間の経験を有したのち、保育者養成の短期大学の教員として7年半の教育活動を経験していた。

(2) 学生：教育課程の講義には、短期大学の保育者養成校に在籍する2年生39名が受講した。受講学生は、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状の資格取得を目指していた。

2. 講義「教育課程論」の概要と進め方

(1) 「教育課程論」の概要と講義の進め方及び教育実践の工夫

本研究の対象となったのは、2学年の前期に開講されている教育課程論であり、半期15回の講義形式であった。授業概要に記載している学生の学習成果は、1) 保育内容の充実と質の向上に資する教育課程・保育課程について理解することができる、2) 教育課程・保育課程の編成と指導計画の作成について具体的に習得することができる、3) 編成・実践・点検・評価・改善の過程について、その全体構造を動的にとらえ理解することができる、4) 保護者や関係機関との連携について学ぶことができる、であった。この学習成果の獲得を目指し、講義は教育課程・保育計画の基礎的な理解を図るとともに、今日的な保育の課題を受け止めた教育課程・保育計画の視点を示すことを目的とした教科書を採用し、毎回講義のテーマの大きな視点・ねらいを伝えていく。学生が理解しやすいように、授業者自身の保育実践を織り交ぜながら説明を進め、まとめとしてその理解の確認を行っていった。講義の導入・展開・まとめにおいて、1) 学生が主体的な発言、学びの行動を促し、積極的な授業参加を担保する雰囲気を作りあげること、2) 学生が保育者の活動の中にある教職課程に対して、自分自身の考えを巡らせ、確かなイメージを持った上で深い学びに誘うこと、を授業者のねらいとして教育実践の工夫を取り入れた。

(2) 講義で用いた授業者自身の保育実践例について

教育課程論の講義の中で取り扱った3つのテーマの授業者の保育者としての実践経験から作り、学生に提供した3つのテーマに関する実践例、「学びをつなぐ保・幼・小の連携カリキュラムとは」「危機管理カリキュラムについて考える」「開かれた園生活のカリキュラム〈幼稚園を拓く〉」を示し、その要点を述べる。

1) 「学びをつなぐ保・幼・小の連携カリキュラムとは」の要点

「学びをつなぐ保・幼・小の連携カリキュラムとは」について、授業者として学生に提供した実践例は、表1に示した通りである。講義の始めに、保育園・幼稚園・小学校が連携することをなぜ必要としているのかを問うと、「幼稚園・保育園は遊ぶ所であり、小学校は勉強をする所である。遊んでばかりいたのが一年生になって急に椅子に座っての勉強についていけない子が多い。そのため戸惑う

ことがないように、幼稚園・保育園の間から椅子に座ったり小学校で学ぶことを早めに学んだりすべきである」と答える者、また反対に、学生自身の経験から「小学校は当然勉強する所と思っていたから困った記憶はない。特に連携の必要性は感じない」と話す学生もあり、この意見の方が多かった。このような学生に、保育者と教師が幼児教育と小学校教育の接続を考えることを通して、子どもたちが連続的に学び育っていく存在であることや、育ちの視点が多様であることに気付き保育者と教師が共に学び合う機会をもつことの大切さを認識すべきであること、また段差の教育的意義を明らかにし「滑らかな移行」を求めて指導技術の向上を図ることが課題であることを話しても必要性を実感することが難しいと考えた。そのため私自身の保育現場での1年間の実践例を通して、子どもにとって遊びが重要であり遊びの中に子どもたちが感じたり思ったりしている意味、遊びながら学んでいることを保育者はじめ大人の側が十分に認識すべきであり、決して小学校教育の先取りのな準備教育をすることではないこと、また幼児ひとり一人の発達過程を引継ぎ適切な支援をしていくことの大切さ、子どもが連続的に学び育っていく存在であることに気付き、連携することにより互いの教育内容を理解し自分たちの方法を見直すことの大切さ等を伝えた。

表1 「学びをつなぐ保・幼・小の連携カリキュラムとは」の教授内容

テーマ	学びをつなぐ保・幼・小の連携カリキュラムとは
学習 成果	(1)子どもたちは一人ひとり連続的に育っていく存在であることを認識すること (2)共に学びあう機会をもつことの大切さを認識し、互いの教育内容を理解し方法を見直すこと、つまり幼児期の発達に応じて幼児の生きる力の基礎を培うことが大切であること
実践例	—保育園・幼稚園から小学校への滑らかな移行をめざして— A保育園・B保育園・C幼稚園・D小学校
幼稚園 教諭の 実践の ねらい	〈育ち・発達がつながる連絡会〉 保育園・幼稚園から小学校へのひとり一人の幼児の育ちの情報交換を行うことにより、個々の発達に応じた適切な支援の仕方を繋げていく。 〈子どもが繋がる交流活動〉 幼児と児童が「かかわりあう・ふれあう」交流活動を通して、互いに豊かな心を育む。 〈学びが繋がる相互の保育参観・授業参観〉 保育や授業を互いに参観し、合同研修会を通して、教育内容の相互理解に努め、それぞれの指導内容を工夫改善していく。
取り組みの経過	①一年生児童の情報交換(6月18日) 一年生の担任より児童ひとり一人の一学期の様子を聞く。新しい環境の中で戸惑っている様子が窺える子に対し、安心感をもって学校生活を送り個性を伸ばすことができるように就学前の様子を話し、適切な支援の方法を探った。 ②小学校音楽クラブの幼稚園誕生会でのミニコンサート(8月20日) 夏休み中の登園日の誕生会に、小学校音楽クラブよりミニコンサートのプレゼント。不登校気味の児童も音楽クラブの日には登校し、幼稚園訪問を楽しみにして練習を頑張ったとのこと。当日小学校の各担任の先生方も応援に来てくださり、とても良い表情で歌っている。園児たちも美しい歌声に聞き入り、知っている歌をアンコールして一緒に歌うなど和やかなそして温かい心になった一日であった。6年間継続して続けている。 ③保育参観・授業参観 (5/9、7/13、10/7・19、11/19・27・30、12/4・9、1/13・28、2/13) 遊びを中心とする幼児教育と教科等学習を中心とする学校教育が、それぞれどのような保育・教育活動をしているのかを参観を通して相互の教育を知ることからのスタートである。その中から自分たちの園・学校でどのように保育・教育をしていくべきかを見直さなければならないと話し合う。 ④一年生「秋祭りをしよう」に保育園・幼稚園が招待される(10月29日) (一年生のねらい)

	○保育園・幼稚園の人を招待して、秋祭りを楽しむ。 ○友だちと協力してお店屋さんの仕事をする。 ○自分のコーナーの遊びが、保育園や幼稚園の人たちに分かるように話す。 (幼児のねらい) ○秋祭りに喜んで参加し、一年生と触れ合い親しみをもつ。 ○一年生の活動の様子から、大きくなることへの期待を膨らませる。 はじめの会での群読「おちば」の張り切った声・合奏「きらきらぼし」の気持ちを一つにした音、また曲の紹介や進行係を一生懸命務めている姿に「先生、見てください！ 私たちはこんなに大きくなりました！」という意気込みを感じた。 第2部の〈秋祭りのお店屋さん〉では「ぼくたちお兄さんお姉さんに安心してついていっちゃい！」と体全体で表現している一年生なりの精一杯のおもてなしの心と自信に拍手と応援したい気持ちで一杯になった。園児たちも、そんな一年生に安心して導かれながら楽しそうにお店を回っていた。 ⑤「五年生と遊ぼう」(12月1日) (五年生のねらい) ○催しの企画・運営を通して最高学年となることへの自覚を養う。 (幼児のねらい) ○五年生と一緒に遊んだり教えてもらったりする中で親しみをもつ。 ○入学を控えた小学校生活に期待をもつ。 五年児童139名・幼児130名という大人数であり、初めての試みであったためどうなることか予想できなかったが、五年生が相談した結果各組毎の活動であった。手作りのボーリングの組では倒れたペットボトルをその都度何度も何度も起こしている者、エアトランポリンの組では五年生と2人ペアで五年生の弾む力で幼児が転んでしまう姿を見て「五年生はじっとしててください！」と園児への配慮をしているリーダー、また折り紙の組では自分が覚え込むまで何度も練習した紙風船を一生懸命教えてくれている者等々、どの組の児童からも「幼児をなんとか喜ばしてあげたい！」という思いやりの気持ちが溢れていた。 自分の5歳の頃を思い起こし、相手の気持ちを推し量りながら企画して準備をしてくれたきらきらと輝いている五年生の姿に感動した。4月からの最高学年を頼もしく思う。園児たちも、土産にもらったメダルを掛け「ぼくのメダルめっちゃええのさ」と自慢げに眺めたり「今日たのしかった！ あんなやさしいおねえさんといっしょに住みたいわ」と話したりしている。お兄さんお姉さんの優しさ・思いやりに触れ大満足であった。
成果と 今後の 課題	○保育園から幼稚園、保育園・幼稚園から小学校への情報交換会(引継ぎ会)は、ひとり一人の幼児の発達や姿と幼児期の教育で大切にしてきたものを伝える意味深いものである。幼稚園や小学校で温かく受け入れられ、新しい環境の中で安心して充実した生活を送り個性を伸ばすことができるよう、ひとり一人の発達に応じた適切な支援を繋げていくことを今後も大切にしていきたい。 ○五年生は、その後に実施された「六年生を送る会」に、幼児との交流会での経験を活かしこれまで以上に「六年生の皆さんに喜んでいただける会にしたい！」という気持ちをもち自主的に活動したと聞き、五年生児童の意欲・可能性をみることで感動した。幼児も五年生の温かい心を体いっぱい感じており、お互いに学びがあり育ちがあるという互恵性を痛感した。今後も「5・5交流」として幼稚園・小学校の教育課程に位置づけ継続して実施していきたい。また他学年との交流も検討していきたい。 ○相互の授業参観や引継ぎ会を通して、小学校生活をスムーズにスタートし充実して過ごせるように、幼稚園・保育園では幼児期にふさわしい生活つまり遊びを通して、創造的な思考や主体的な態度などの基礎を培うようにすることである。幼児が主体的に遊ぶ生活を充実させながら学ぶことを援助し、そのなかで幼児が興味をもって関わり、考え、工夫し、物事に積極的に取り組み自分を高めていくようにすることである。原点に立ち返り、自らのカリキュラムに沿って保育・教育を一層充実させていくことが大切であると実感した。 ○大規模校、大規模園、そして2つの保育園が離れていることもあり、日常的に交流しにくい条件にある。また幼稚園・保育園からの連携に対する熱い思いがややもすると一方通行になりがちであった。連携の必要性、何ができるか、何をしなければならないかをさらに話し合い多方向に思いを高めていくこと、指導者ひとり一人の意識改革が課題であると痛感する。

2) 危機管理カリキュラムの必要性について考える

「危機管理カリキュラムの必要性について考える」について、授業者として学生に提供した実践例は、表2に示した通りである。いつ、どのような危機、災難、事故が、誰に降りかかってくるかは予想もつかない現代である。この時代にこそ、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質・能力、つまり「生きる力」が求められ、この力こそが子どもを危険から守るのである。学生に危機管理カリキュラムの必要性を問うと、小学校から定期的に避難訓練を繰り返してきた経験から「いつ災害が起きても対応できるように訓練をして避難の方法を身に付けておく」と答えた。これまでは児童・生徒という立場であったため訓練を受けるという受け身の姿勢で「みんなと一緒に逃げさえすればよい」と思っていたこの答えで当然であるが、これからは保育者である。何よりも子どもたちの安全を第一に考えなければならない立場になる。健全な成長が阻害されないように、子どもに自らの身体を、生命を守る術を子ども期より伝えておくことも保育の重要な使命の一つである。しかし、事故防止のため危険や恐怖を強調しすぎるとかえって危険判断や危険対処法が身に付かなくなる恐れがある。危険を理解させることと、必要以上に怖がらせないという配慮が必要である。「自分の命は自分で守る」という心情・意欲・態度を育てることが子ども期の危機管理カリキュラムの目指す方向である。

表2 「危機管理カリキュラムについて考える」の教授内容

テーマ	危機管理カリキュラムについて考える
学習 成果	(1) 子どもに自らの体・生命を守る術を子ども期より伝えておくことも幼稚園・保育園の保育の重要な使命の一つであることを認識しておくこと (2) 避難訓練の心構えについて、機械的に訓練を繰り返すのではなく、何のためにするのか、ねらいや意味を真剣に考えることが大切であること (3) 日常生活のあらゆる状況で起こりうる危険・事故を想定し、防止のための措置を万全に行うことの大切さを知ること。油断は禁物であること
実践 事例1	ある園で避難訓練を参観した。避難場所に出てきた幼児から一人並びにさせ各担任が人数確認をして園長先生に「〇組〇名全員避難しました」と報告された。訓練だから全員避難したものとしている。しかし実際もし人数が足りない場合、誰が避難できていないのかを掴むのに時間が掛かってしまう。もちろん子どもたちに「いないのは誰？」と聞いても分からない。兎に角園舎に引き返し探し探さなければならない。誰かが特定できていないため「誰か残っていませんか？ 誰か…？」と呼ぶ。しかしその子は「誰」という名前ではないため自分が呼ばれているという意識がなく返事ができない。特定できれば「〇子ちゃん！ 居たら返事をして！」と呼ぶことができ、さらに〇子の日常の様子を思い起こし「〇子はホールのピアノの後ろが好きだから…」と探す場所のポイントを絞ることができる。 ここまで話してから、学生に廊下に出るように伝える。(事前に一人の学生に教室に残るよう依頼しておく)廊下はごった返している。「さあ今ここに何人いるか数えてみます」と言って数え1人足りないことを告げ「誰がいなくていいのでしょうか？」と尋ねる。「〇さんではないですか？ あら居るわ」「あつ△さんだ」「私はここに居ます」…となかなか特定できない。「では出席順に並んでみよう」と言う。並び始めると直ぐに「◎さんだ！」と気づく。こうして自分たちで実際に動いてみて、マンネリ化した練習を重ねるのではなく、どのように避難することが最善かを毎回全職員で話し合うことの大切さ、さらに保育者自身が落ち着いて的確な判断から行動をとることの大切さを実感させた。

実践 事例2	危機管理は事件・事故の発生を未然に防止すること、被害を最小にとどめることが最善の方法である。そのためには、関係機関、地域社会との相互連絡体制を構築しておくこと、子どもへの適切な指導、また施設・設備の安全点検・整備が必要である。しかし、連絡体制及び点検を怠っていた失敗例を話す。 女性職員のみ7名の独立園に勤務していた時の事である。運動場を挟んだ所に小学校があり男性教職員が20名ほどおられる。幼稚園で不審者等の非常時、担任が防犯ベルを押すと小学校の職員室の非常ベルが鳴り先生方が救助に来てくださる体制になっていた。そのため幼稚園の教員は常にベルを携帯し、長年押せば助けてくださると信じ安心して暮らしていた。ある年の職員会で、今度の避難訓練で一度ベルを鳴らしてみることになった。そのためには事前に小学校の先生方に連絡をしておかなければならない。早速小学校に出向き、校長先生に説明すると「そんなベルのことは聞いたことがありませんよ。ちょっと教頭先生に聞いてみます」と言われ一緒に職員室に行く。教頭先生も「初耳です。どれが鳴るんですか?」と言って黒板の周りを見回されると4〜5個の拡声器が設置してありどれかは分からない。職員室におられた先生方にも尋ねられたが誰一人ご存知ない。哑然とした。次の日全職員が集まれる職員朝会でベルを鳴らし皆さんに認識していただくことにした。午前8時30分、教頭先生から「鳴りました! 鳴りました! 分かりましたで」と電話をいただいた時のことは忘れられない。 関係機関との連絡体制、施設整備の安全点検・整備の大切さを十分理解していてもこの怠慢さでは助かるものも助からないことを失敗例を通して学生に伝える。
-------------------	---

3) 開かれた園生活のカリキュラム 〈幼稚園を拓く〉

「開かれた園生活のカリキュラム 〈幼稚園を拓く〉」について、授業者として学生に提供した実践例は、表3に示した通りである。幼稚園を取り巻く地域社会は人的環境の宝庫である。リソース・パーソンとして保育活動への参画を依頼することは、幼稚園における人や文化とのかかわりを豊かにし、幼児の興味・関心、人と積極的に関わろうとする意欲を刺激し、好奇心や探究心が高まる。

表3「開かれた園生活のカリキュラム 〈幼稚園を拓く〉とは」の教授内容

テーマ	開かれた園生活のカリキュラム 〈幼稚園を拓く〉とは
学習 成果	(1) 地域に暮らす高齢者・障害者等多様な人たちとの出会い・交流により豊かな原体験が得られ、幼児が成長する場になること
実践 事例1	園では保育活動の1つとして、トマト・ピーマン・きゅうり・なすなどの夏野菜を栽培し、収穫を楽しむ。バック詰めトマトしか知らない子どもたちは、黄色い花からできた小さい実が日に日に大きくなり赤く染まってく様子に心を躍らせ、嫌いだった子どもが食べられるようになったりするため教育課程に位置づけている。 例年自分たちの知っている知識で指導していたが、ある年地域に住んでおられる元農業普及員の方に指導を依頼した。早速園に来てくださり植木鉢の大きさを見て「12号鉢には〇リットルの土を入れますから人数分準備し、肥料も〇グラムが一人分として準備してください」と指示して帰られた。次の日「シートを出してください。土と肥料を広げてスコップで混ぜましょう」と言われ、まるで左官が砂とセメントを混ぜるのと同じように何度も何度も行き返りして混ぜる。これだけ混ぜれば子どもたち誰がどこの土を掬っても全員同じ粒数の肥料が入っておりトマトのできに良い悪いはない。土作りが肝心というが正にその通りであると思った。次は水やり。子どもたちに登園すると必ず水やりをするよう促していた。雨の日にも傘を差しながら水やりをする幼児も出る始末である。 ある日普及員さんが来られトマトの生長具合を見て「毎日水やりをしていませんか? 毎日水やりをしているといつも水がもらえてと思って根は上を這う。時々しか貰えないと根は水分を求めて鉢の下の方まで伸びるのです。葉がぐったりしてきたら水が不足している知らせ。その時によく水遣りをします。」と言いながら一本の苗を抜かれた。本当に鉢の上部だけを這っている根の形であった。その他、脇芽だけではなく5段花芽が付いたら摘芯するなどの指導を受け、トマトの出来具合は大きさ・量ともに例年の3倍であった。何よりも、80歳を越され生き字引のような存在の普及員さんの人柄に触れ温かい心の交流ができたことは、子どもたちはもちろんのこと私たち職員も幸せであったと伝える。

実践事例2	秋の遠足に、学校で飼育している豚や牛との触れ合いを楽しむ。さらに高校生との出会いや関わりを楽しむことをねらいとして農業高等学校に行く。牛舎の真ん中を歩き、真っ黒な巨体、大きな目、先の尖った少し怖い角、鼻輪、またよだれをたらしたり尿を放ったりする普段目にするのできない様子を悲鳴を上げたり驚いたりする子どもたち。どの牛にも自分たちと同じように名前が付いていることに疑問をもち高校生のお兄さんに質問する子も出てくる。そして、最も大人しい牛の背中にお兄さんに抱えて乗せてもらい記念写真を撮る。最初の頃は、牛よりもこのお兄さんの方が怖そうと不安気である。しかし少しすると、はにかむ高校生からやさしさが伝わってきて子どもたちはいい表情になる。また豚舎では、生まれたばかりの9頭もの豚が1頭の母豚の乳に吸い付いている様子に感動したり餌やりを経験したりする。豚舎に入る時には、雑菌を持ち込まないように入り口に置いてある消毒水で靴底を消毒しなければならない。子どもは要領が悪く靴全体を消毒水に漬けてしまうため、お兄さんに一人ひとり抱えてもらって底面だけを消毒する。高校生が子どもたちの所に来てくれた時の最初の様子は「どうして俺がしないといけないのだ」と不満気である。ところが牛の背中に乗せたり豚舎の消毒の手助けをしていく中での子どもたちとの言葉のやり取りや「お兄ちゃんありがとう！」というお礼の言葉に、別れる時はとても良い表情である。私たち職員はこの光景を見ることが大好きである。ここでも「互恵性」がいえると考える。 こうして交流を積み重ねることで、リソース・パーソンに対する幼児の親近感や愛着が深まり、温かい心の交流、人との関わりをめぐる豊かな原体験が得られるのである。
--------------	--

3. 本研究における教育実践の工夫の評価

授業者による教育実践の工夫に対する評価は、当該、短期大学で実施している学生による授業評価アンケート（以下、授業評価アンケートとする）を用いた。授業評価アンケートの大枠の構成は、授業者に関する評価11項目、学生自身に関する評価5項目、授業全体に関する評価1項目であり、「とてもそう思う」から、「全くそう思わない」の5件法で回答する形式、複数選択可能な項目（1－11）であった。本研究の目的に合致する項目を選別した授業評価アンケートの項目を表4に示した。

表4 本教育実践の評価に用いた授業評価アンケートの項目

教員への評価	項目	質問内容
	1－(1)	授業に対する教員の真剣さや熱意を感じましたか。
	1－(2)	声の大きさや話し方や説明の仕方は理解しやすいものでしたか。
	1－(3)	教材（黒板、資料、テキスト、ビデオ等）内容理解を促進するものでしたか。
	1－(4)	毎回の授業は、テーマが明確で重要なポイントをはっきりしていましたか。
	1－(5)	学生が発言や質問しやすい雰囲気を作るなど、授業への参加を促す努力をしていましたか。
	1－(8)	教員は受講生に対して公平に接していましたか。
	1－(9)	教員は勉強する雰囲気が乱れないよう、学生のマナー等に注意を払っていたと思いますか。
	1－(10)	教員は受講生の理解度や反応に目を向けながら授業を進めていましたか。
	1－(11)	教員がこの授業で工夫したと感じるものを選んでください。
学生自身の評価	2－(4)	この授業を理解でき知識が深まり、あるいは能力が高まりましたか。
	2－(5)	この授業により、知的好奇心が刺激され、もっと勉強したいという気持ちになりましたか。
総合評価	3	この授業は総合的に判断して意義あるものでしたか。

Ⅲ. 結果

授業評価アンケートは、38名(97.4%)から回答を得た（図1及び図2）。授業者の教育実践行動に関わる項目の評価においては、1－(1)「授業に対する教員の真剣さや熱意を感じましたか」は4.55、1－(2)「声の大きさや話し方や説明の仕方は理解しやすいものでしたか。」は4.47、1－(3)「教材（黒板、資料、テキスト、ビデオ等）内容理解を促進するものでしたか。」が4.16、1－(4)

「毎回の授業は、テーマが明確で重要なポイントをはっきりしていましたか。」は4.37、1－(5)「学生が発言や質問しやすい雰囲気を作るなど、授業への参加を促す努力をしていましたか。」が、4.16であった。1－(8)「教員は受講生に対して公平に接していましたか。」は4.24、1－(9)「教員は勉強する雰囲気が乱れないよう、学生のマナー等に注意を払っていたと思いますか。」は4.50、1－(10)「教員は受講生の理解度や反応に目を向けながら授業を進めていましたか。」が、4.26であった。複数選択方式で教員の授業実践の工夫を問う1－(11)「教員がこの授業で工夫したとを感じるものを選んでください。」では、配付資料が11件、板書8件、関連する情報や話題収集13件、教員とのコミュニケーション14件、技術向上のための指導や助言10件、授業内外の課題1件、テキストや教科書の選定9件、授業内の学びが深まる雰囲気作り9件、受講生同士のコミュニケーション3件、その他2件(「交流授業」「授業はじめの歌」)、となった。

学生自身が学習成果の獲得の実感に関わる項目の評価においては、2－(4)「この授業を理解でき知識が深まり、あるいは能力が高まりましたか。」は4.18となり、これからの学びの意欲にかかわる2－(5)「この授業により、知的好奇心が刺激され、もっと勉強したいという気持ちになりましたか。」は4.13であった。講義の総合的な意義に関する3「この授業は総合的に判断して意義あるものでしたか。」は4.29となった。

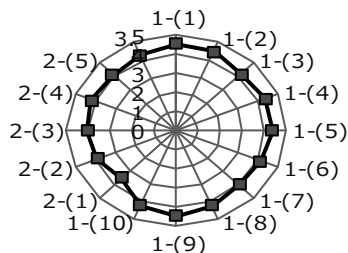


図1 教育課程論の学生による授業評価アンケートの結果

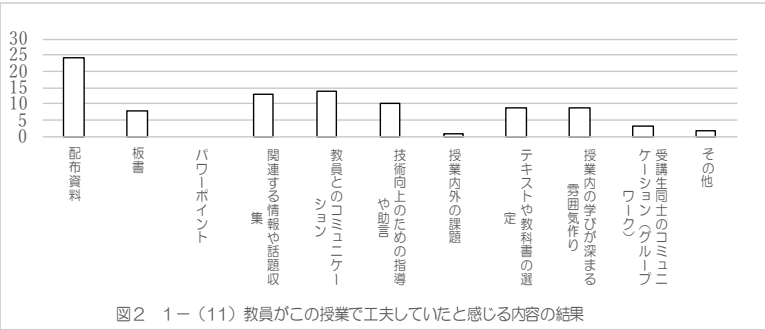


図2 1－(11) 教員がこの授業で工夫していたと感じる内容の結果

IV. 考察

本研究において、保育者としての羅針盤といえる教育課程論を学び、授業概要の学習成果の獲得に向けて、養成課程にある学生の実態に応じて、授業者として2つのねらいを持って、教育実践の工夫を取り入れた。その結果、学生が授業全体・内容の意義を見出し感じ取り（図1の項目3）、学びへの意欲、知識あるいは能力の高まりという学習成果の獲得にかかわる学生の実感に結び付いていることが（図1の項目2－（4）及び（5））の肯定的な評価から読み取れる。このことから授業者のねらいは、教職課程論という講義においては、学生の学習成果の獲得に対して必要な条件であったと考えることができる。そこで、そのねらいを達成するために、授業者が教育実践において仕掛けた様々な工夫が、どのようなものであったかを述べながら、その効果について検討していく。

1. 学生の抵抗感を減らし、授業への主体的な参加を促す雰囲気作りの仕掛けについて

教育課程論という聞きなれない言葉は、学生にとって「難しい、聞いても分からない内容かも」という心証を与えてしまうかも知れない。そうなってしまえば、学ぶ前から授業に対する抵抗感が強まり、授業運営の仕方によっては、保育者としていくら重要な内容であろうがなかろうが、門前払いされてしまっただけの意味がない。それは学生の学びに向けた行動にも影響がでかねないことを、授業者は懸念する。授業者が主導性を強め、一方的な知識の教え込みというような教育実践により作られる学びの場の雰囲気では、学生が耳を傾けてみよう、積極的に参加してみようと思う気持ちは望めないだろう。本研究において、授業者は教育実践の工夫として、講義の開始時に季節の歌を歌う、出欠席の呼名時に、季節に合わせた花、野菜、果物、また魚、動物の名称等、どのような講義に対する学びの意識や構えの学生でも、自分の言行で表現することができる仕掛けを導入した。さらに、各回の講義のテーマに対して、学生が“今、どのような考えを持っているか、理解しているかなど”の学生が自身の思いや考えを主体的に発言することを多く求め、それに授業者が応答しながら展開する意識を持つことで、双方向の学びの場を作り上げようと仕掛けを行った。このような授業者の教育実践の工夫により、作り出した学びの場の雰囲気に対して、学生がどのようなものであったと感じているか、読み取れる1－（4）（5）（8）及び（10）の肯定的な評価（図1）から、授業者の教育実践の工夫が功を奏していることが推察できる。また、学生は、教員が授業で工夫したと感じる内容に対して、授業者とのコミュニケーション及び学びが深まる雰囲気作りをあげており、教員の教育実践の意図を学生も感じていたことが分かる（図2）。

2. 学生が自分自身の考えを巡らせ、確かなイメージを持ち、深い学びに誘うための教育実践の工夫について

各回の講義では授業者の保育者としての長年の経験を基にした実践例を教材として配付し、その説明は、うまくいったことよりも失敗したことに焦点を当てた。これは、学生がなぜ、うまくいかなかった

たのか、の“なぜ”の部分に考えを巡らせることができるように、意図した仕掛けであった。このような授業者の実践例の提供は、保育者としての専門的成長を促すための、日々の姿を謙虚に受けとめ、自己内の対話を積み重ねていく省察¹⁾の過程となることを期待したものであった。先に述べたように講義のテーマに対する学生への思いや考えを確認したことは、授業が進むうちに、学生自身が、その考えの違いに気付くための仕掛けでもあり、それにより深い理解に結びつけたいという工夫であった。このような授業者の教育実践の工夫は、講義の中で学ぶべきテーマを学生がつかみ取ることを助け、教材として機能し内容の理解を促進したことが、図1の1－(2)から1－(4)の肯定的な評価から読み取ることができる。さらには、教員が工夫したと感ずる内容に配付資料(11件)があげられていることから(図2)裏付けられる。

V. まとめ

保育者養成課程は、様々な専門知識・技術を学び保育者として育ちゆくためには、その内容により様々な課題が存在する²⁾。その中でも、齋藤ら(2016)³⁾は、学生自身が実体験できていない、もしくはその経験が十分な内容を学ぶことの難しさを指摘するとともに、そのような学生に対して、それを補填するような特別な機会やより実践的な授業を作り上げる必要性を述べている。教育課程論のような特性のある内容の全てを学生が限られた実習等の時間にあった実体験に即して提供することは、現実ではあり難い。そのような点からも、本研究の授業者のねらいから教育実践の工夫にあるような、授業者の保育者としての実践経験という特長を生かすからこそ学生に提供できる“生きた教材”は、教育活動の質を高めることができるひとつの方法であると言えるだろう。豊かな実務経験を持ち養成校の教壇に立つ一人ひとり、保育者としての信条を持ち長年、子ども達、保護者、地域の方々と向き合ってきたはずである。その時間から得られた想いの込められた“生きた教材”は、養成課程で学ぶ学生にとって、大きな学びに結びつくものだと考えられるのではないだろうか。その“生きた教材”を学生にどのように届けていくか、教壇に立つものとして、教育実践を高める工夫が求められていると感ずる。本研究の限界として、授業概要にある学生が身に付けるべき知識や技術、実践例において、学生に期待する学習成果の獲得に、どのような影響があったのかを、直接的に測れていない。今度、独自の質問紙調査や半構造化面接などを用いて検討する必要がある。

引用文献

- 1) 吉村香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美(1997) 保育者の成長における実践と省察 保育学研究, 35,288-303.
- 2) 池田幸代(2012) 保育者養成校の学生がもつ子育て家庭イメージに影響を与える要因 人間関係学研究,18,1-10.
- 3) 齋藤勇紀・神澤絢子・竹村香・堤幹雄・氏原理恵子・湯澤ちふ美(2016) 保育者養成校の学生が